



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

HIU

2009年
12月発行
Vol.3

教育GPニューズレター

Hokkaido
Information
University

巻頭言

今後のFD活動に向けて

経営情報学部長

林 雄二

FD活動が義務化されて以来、本学では様々な取り組みをし、会議を重ね、個々の教員は少なからぬ負担を負いながら努力を重ねている。昨年のFD研究会の場、今年教育GP評価委員会の場で、本学でのFD活動についての一類りの説明を聞かれた学外委員の先生から、あまり頑張り過ぎて負担感が大きくなることを危惧するという言葉をいただいた。本学教員として、ほっと肩の荷が軽くなった思いであった。

このような状況、すなわちFDという（教育内容、研究内容ではなく、学習支援、学生指導等を包含するものでもない）教育力向上への活動に精力を注ぐ状況はいつまで続くものであろうか。現在はFD黎明期として、全員の最低限度の教育努力を普遍化する段階にあるといえそうである。今後FD活動が進められていく中では、次の2点が考慮されて欲しいと考えている。その第一は、教員一人一人の特徴を活かすこと、第二には、

日本に合ったFD活動の進め方を求めていくことである。

1) 教員一人一人の特徴を活かすこと

皆で足並み揃えて教育向上に取り組むことに、ある程度の共通認識が得られた後は、各教員の特徴を伸ばすことに目が向けられることが必要である。教員に強いる努力が、過度に負担の大きなものであれば、教育のみならず他の領域（研究、大学運営、社会貢献、学生活動支援など）に力を発揮している教員の意欲を削ぐことにつながってしまう。すべての面で満点の活動をする教員は存在しようがなく、むしろ教員一人一人の個性や特徴をいかに活かすかを基礎にしてFD活動が展開されることが期待される。

教育経験による差もあろう。教員の経験年数などに応じて、授業に対する取り組み姿勢の相違があるといわれている。初期段階：教育内容を充実させることで教員自身に関心を持つ段階、中間段階：教育方法やツール・機材に関心を持つ段階、成熟段階：学生の主体的学習努力に関心を持つ段階。それぞれの段階の教員群にも対応した教育向上への活動が期待される。

目次

- 1. 巻頭言..... 1
- 2. ピア・レビュー実施報告..... 3
- 3. 米国3大学訪問記..... 7
- 4. FD活動 行事予定... 1 2
- 5. FD委員会WGの活動実績..... 1 2
- 6. 編集後記..... 1 2

2) 日本に合ったFD活動を

戦後日本の企業における品質管理(QC)活動は、W・E・デミング(William Edwards Deming)博士の指導のもとに発展した。博士の哲学では、品質向上のために客の目線を大切にすること、協調で仕事をする、グループワークを基礎にしたボトムアップも重要視することなどが強調されていた。日本の伝統的仕組みである終身雇用、年功序列、職場仲間意識などと博士の哲学がむしろマッチして、日本企業の品質管理手法が、1970年代以降は世界一の評価を受けるまでになった。もちろんデミング博士の母国アメリカへも日本のQC活動が輸出されるほどになったことは言うまでもない。義務ではなく、協調した努力が受け入れられることへの喜びを見出すことで、日本のQC活動は目覚ましい広がりを見せたと考えられる。

FD活動の生まれはアメリ

カである。将来は日本の大学でのFD活動が、世界で評価を受ける日が来るかもしれない。そのためには、日本人に向けたFD活動が根付くことが望ましいが、それはどのようなものであろうか。

小グループで知恵を出し合いながら進めるあまり形式的でない会合(時には居酒屋)が日本人には向いていると思われる。教育活動に関してごく小さなテーマ毎に、自発的な小さなグループ活動で、評価が目的ではなく新たな試みを教えあい議論しあう協調的な場を持つことは効果的ではないだろうか。本学の2年ほど前のFD研究会で、個々の教員の教育ティップス(授業運営のちょっとした工夫)を出し合いティップス集を作成した。「学生にご褒美をあげる」「ちょっと考えてごらん」等々、個々の教員なりに工夫を凝らしていることが感じ取れた。このような小さな工夫の積み

重ねが大きな成果に繋がるものと思われる(QC活動も全く小さな工夫の積み重ねであった)。

研究テーマを同じくする教員の少人数でのディスカッションは楽しいものである。教育方法を研究することについても同じく楽しいものであって欲しい。本年度後期のピアレビューの実施要項には、「レビューでは授業担当講師を褒めることから始めよう」と記されていた。方向性としてうれしいことではないだろうか。レビューが楽しいものになって欲しいものである。

学生の為に、さらに教員自身の為にも、学習する学生の姿に手ごたえを感じる教育を目指して、義務感からではなく喜びを伴う活動として、教育力向上に前向きに取り組んでいきたいものである。



ピア・レビュー実施報告

FD委員会WG2 向原 強

坂本 英樹、梅津 真

大島 直樹、近藤 始

● ピア・レビューとWG2のミッション

皆さんご存知の通り、「ピア・レビュー (peer review)」とは何らかのものの評価を専門的・技術的知識の有する同業者・同僚 (ピア) によって行われる制度をいいます。科学研究論文の査読や、科学研究費の審査、ソフトウェアの検証などにも使われる用語ですが、ここでは、「授業」をピアによって評価しようというもので、「授業参観制度」といった方がわかりやすいと思います。本学におけるピア・レビューは、経営ネットワーク学科 (現 先端経営学科) にて、平成16年度から行われてきましたが、FD委員会の発足と同時に、平成20年度から全学的な取り組みが開始されました。この制度の導入をミッションとして作られたのが我々WG2です。

WG2のミッション

FD活動の一環として本学にピア・レビュー制度を導入し、これを実質化するための支援活動を行うこと。

WG2はこのミッションを実現するために、

1. 実施案の作成・改訂
2. 教員間の連携・調整
3. 実施の促進活動
4. 結果のとりまとめ
5. 結果の活用方法の検討

などをおこなっていきます。

● ピア・レビューの目的

FD先進国の米国では、ピア・レビューは、教員評価と授業改善を目的に実施されてきました。特に、テニユア・トラック制が一般的である米国では、ピア・レビューはテニユア審査 (任期のない職を獲得するための審査) の基礎資料と

して利用されてきた経緯があります。しかし、本学では、これまでのところテニユア・トラック制度を導入する予定もありませんし、教員評価に利用するなどの合意はありませんので、あくまで、授業改善に利用することが目的となります。

授業改善を実現するためには、多面的な仕組みが必要であると考えられます。学生による授業評価アンケート (学生アンケート) もその一つですが、学生の要望に迎合するのであれば、教育の質の改善とはなりえません。学生アンケートでは見いだすことのできない授業改善の手法を見いだす一つの機会が、ピア・レビュー制度です。また、学生アンケートは、授業を実施する教員 (授業者) の授業改善のために行いますが、ピア・レビューの場合はそれだけではありません。授業者の授業改善に活用するのはもちろんのこと、授業を参観する教員 (観察者) の授業改善に活用することも重要です。

● ピア・レビューの実施シナリオ

経営ネットワーク学科での導入経験はあったものの、全学的な取り組みとしてこの制度を導入するとき、どのような方法がよいのか? という点に関しては、暗中模索の段階からWG2は議論を出発しました。そこで、WG2では、制度の実施を3つのフェイズに分割して導入を実現することにしました。

まずは、どのような方法でもよいから、ピア・レビューという制度を導入することが重要です。この段階をフェイズ1としました。次の段階として、導入した制度を改善していくこととします。改善を繰り返すことで、本学にあったピア・レビューの方式を見いだすことができるであろうと考えました。これがフェイズ2です。数年のフェイズ2の後、最終段階としてピア・レビューを運用するために必要な組織、制度をかため制度としての実質化をはかろうと考えました。これがフェイズ3です。

フェイズ1
制度導入

フェイズ2
効果的手法
探索

フェイズ3
制度の実質化

● 平成20年度後期実施方法

平成20年4月に発足したWG2は、フェイズ1として平成20年後期のピア・レビュー制度の導入の実現をめざして活動しました。

一般にピア・レビューは、多くの教員が、1人の教員の授業を参観する研究授業方式と、1人ないし数人の教員が、1人の教員の授業を評価する方式に分別できます。フェイズ1は制度の導入が目的であるものの、全教員が参画する制度でなければ意味がありません。その観点から、研究授業方式はふさわしくないと考えました。制度の有効性が、授業改善に関するテクニカル面よりも、教員の意識改革が最重要課題であると考えたためです。そのような議論から実施した平成20年度後期の実施概要は次頁の通りです。

フェイズ1では、全教員がピア・レビュー制度に参画しやすいように、敷居をできるだけ低くするように工夫し、

- ▶ 授業を参観すること
- ▶ 事後検討会を実施すること
- ▶ 結果をWG2のメーリングリストに報告すること

以外には、特に制約をもうけませんでした。

平成20年度後期ピア・レビューの概要

- 1) 後期授業(10月1日～12月22日)で実施する。
- 2) 一部の(教え上手な)教員による研究授業方式ではなく、教員全員が参観し、参観される方式とする
- 3) 目的は授業改善であり、教員評価でないことを周知徹底する。
- 4) 2名によるレビューグループを作成する。
- 5) 評価は、「参考になった点」、「改善した方がよいと思われる点」、「その他気づいた点」について定性的に記述するものとし、定量的な評価は行わない。また、観察の観点は参観者に一任する。
- 6) 授業後、事後検討会を実施し、報告書のメールによる提出を義務化する。

レビューグループとは、教員で作られるグループで、レビューグループ内で、お互いの教員の授業を参観し、参観してもらう方式を採用しました。フェイズ1では、レビューグループは、すべて2名ずつのペアとしましたので、すべての教員はただ1人の教員の授業を参観し、また、ただ1人のみの教員に参観してもらえばいいだけとなります。

非常に単純な方式ですが、その結果、下表の通り、対象教員全員が授業参観・事後検討会・報告書の提出に協力していただきました。

平成20年度後期レビュー報告書提出状況

	先端経営	システム情報	医療情報	情報メディア	合計
対象者数	14	18	16	22	70
提出報告書	14	18	16	22	70
提出率(%)	100	100	100	100	100

フェイズ1は、とにかく制度を導入し、全教員がピア・レビューに参画できるようにすることが目的でしたから、それは達成できたものと考えています。

● 平成20年度報告書の分析

1. 記述件数

平成20年度後期のレビュー報告書は対象者の人数分ですから、70部集まりました。その中には、参考になったという意見(参考意見)が190件、改善すべきという意見(改善意見)が132件、どちらにも属さない意見(その他意見)が28件の合計350件の記述ありました。1人あたり5件の記述が含まれていたこととなります。教育GPニューズレターの前々号では、改善意見がすくないことを反省点にあげましたが、参考意見と改善意見の比率がほぼ5:3となった今回の結果は授業改善に役立つ効果的な知見をえるためには、健全な結果ともいえます。

どちらにも属さない意見には、ピア・レビュー制度に対する意見15件があります。15回の講義の一回分をみただけでは評価できないというのが大半でした。

2. 記述内訳

報告内容のうち最も多かった項目が、講義スタイルに関するもので185件ありました。そのうち、参考意見が111件、改善意見が68件、その他が6件でした。代表的なものは以下の通りです。

<①授業スタイルに関する記述例>

参考意見

- 1) 旬な話題を提供し、講義内容と関連付けて説明することで、集中を促している
- 2) 比較的最近の動向や関連する技術を短い時間の中で系統的に説明している
- 3) 具体例やデモが色々準備されている

改善意見

- 1) 板書をところどころ取り入れた方がよい（わかりにくい言葉など）
- 2) 説明に使う題材をより身近なものにしたほうがよい
- 3) パワーポイント等の説明が多いと、学生の集中力が失われる。板書や質疑応答を取り入れるなど、黒板とパワーポイントの効果的な活用に工夫とバランスが必要
- 4) 早口である。特に外来語の講義は、ゆっくりと話したほうが分かりやすい

次に多かった記述は、学生との対応に関するもので、116件ありました。そのうち、参考意見が65件、改善意見が48件、その他が3件でした。ピア・レビューはどうしても専門家の立場から授業内容そのものに目がいきがちです。しかし、授業の聞き手が学生であることを考えると、上記の授業のスタイルや学生との対応に着目することは、授業改善という観点から好ましいことと思います。その具体的な内容は次の通りです。さらには、講師間の連携に関する記述が25件、提供する資料に関する記述が13件、授業環境に関する記述が11件ありました。

具体的生データは、FD委員会活動状況ポータルでみることが出来ます。WG2では、より

多くの教員に、これをみていただきたいと考えています。生データレベルでこれらの情報を共有する仕組みこそが、本学のFD活動のコアコンピタンスだと考えられます。他の大学のFD活動をみても、できそうで、できないことなのです。

<②学生との対応の記述例>

参考意見

- 1) 学生の名前をきちんと把握している
- 2) 演習問題（課題）を複数用意している。特に講義の最初や最後に行う理解度の確認が効果的
- 3) 私語に対して、適切に注意していた

改善意見

- 1) 座席指定を行い、前方に着席させたり、グループ作業などにより学生が集中できる授業環境を作る
- 2) 課題を独力で解決しようとして質問せず、結局解決できないまま投げ出してしまう学生がいる
- 3) 黒板に向かっての講義が多く、生徒を見ていない

<③その他の記述例>

参考意見

- 1) 他教授とできるだけバランスをとって幅広い教え方をしている
- 2) 教室の暖房調整を頻繁に行い、学習環境に配慮

改善意見

- 1) 受講者数や黒板の使用状況に応じて、教室の変更を行いたい
- 2) E-Learningシステムを積極的に導入・活用し、未履修、途中放棄学生へのフォローや基礎知識の復習などを工夫する

● 平成21年度実施にむけて

1. 前期実施概要

今年度からフェイズ2に入ります。すなわち、効果的な制度の探索段階です。WG2では制度を改善するために、前期の段階で以下の点を変更しました。

- ▶ レビューグループを2名とする制約を緩和する。
- ▶ 教養教員に関しては、学科横断型のレビューグループを作成し、専門のより近いグループとなるように工夫する。
- ▶ 観察項目を設置して、レビュー報告書が書きやすくなるように工夫する。

以上は、ピア・レビューを通して、各教員により多くの知見を得ることができるように行った工夫のつもりでもありますが、一方で、敷居をできるだけ低くしたフェイズ1よりも、各先生の負担増をお願いすることになりました。

2. 前期実施結果

前期のピア・レビューの実施結果は以下の通りです。

平成21年度前期レビュー報告書提出状況

	先端経営	システム情報	医療情報	情報メディア	教養	合計
対象者数	8	14	11	16	22	71
提出報告書	7	12	11	14	22	66
提出率(%)	88	86	100	88	100	93

(09/10/22現在)

平成21年度前期の報告書提出率も高いもの(93%)でしたが、100%とはなりません。教員の負担が増えたことに加え、WG2による実施プロモーション活動をあえて行わなかったことが大きな要因でしょう。これは、授業改善のために他の先生の授業方法を勉強することは、各教員の自主的な取り組み姿勢が重要であると考えたためです。また、この取り組みがルーチン化していくためには、WG2の業務負担は最小限でなければならないとも考えました。

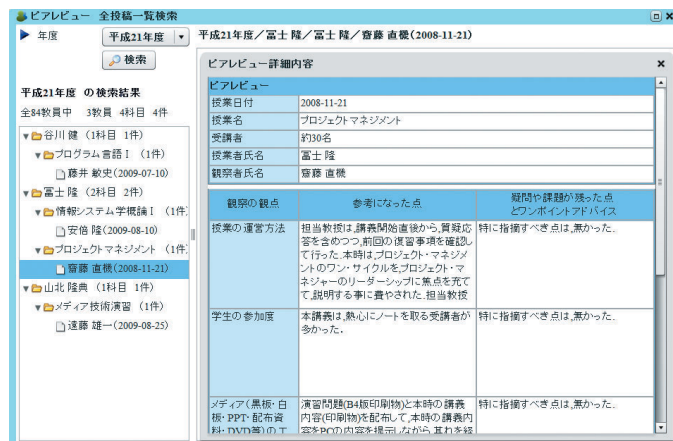
その他各教員の諸事情も、様々ありましようが、単なる提出忘れが原因であるとするれば、現在開発中のFD活動支援システム(CANVAS)によって、その問題は解決することでしょう。

● 最後に

本学のようにほぼ全教員がピア・レビューを実施する大学は類をみません。これは本学のFD活動に関する取り組み姿勢を象徴する結果といえます。FD活動に関する先進的な大学いわゆる山口大学・大学教育センター長の岩部浩三先生からも、本学の規模は効果的なFD活動を進めるのに丁度よいであろうと、心強い言葉をいただいております。WG2では、全教員による取り組みという基本姿勢を維持しつつ、より効果的な方法を探索していきたいと考えています。

現在実施している平成21年度後期のピア・レビューでは、一部教員によるCANVASの試験運用も予定しています。さらに、他のWGとの連携をはかり、本学のFD活動の実質化に貢献していきたいと考えています。皆さん、ご協力ください。そして、よりよい大学を作っていきます。

CANVASによる入力画面





米国3大学訪問記

F D委員会WG 7
山北 隆典

9月13日から18日の日程で、米国の大学におけるFD活動への取り組みについて調査する機会をいただきました。訪問団は、WG 2の向原先生、WG 3の三浦先生、WG 5のソーラ先生、そして山北の4名です。訪問先はニューヨーク州バッファローにあるカニシアス大学を中心に、同州のナイアガラ大学、ニューヨーク州立大学バッファロー校です。この3大学は地理的に10kmから30km程度しか離れておらず、緩やかな連合を組んでFD活動を行っています。

9月13日に空路シカゴ経由でカニシアス大学のあるニューヨーク州バッファローへと向かいました。バッファローはニューヨーク州第2の都市で、その人口は292,648人（2000年）だそうです。文化・教育・医療の中心的な都市で、USAトゥデイ紙（2001年）では「アメリカで最もフレンドリーな都市」と紹介されたようです。

さて、緊張の9月14日朝を迎えました。9時にカニシアス大学Center for Teaching Excellence（CTE）のPatricia A. Coward博士（Patさん）が我々の宿泊先ホテルまで出迎えに来てくれました。カニシアス大学のFD活動は1992年から



カニシアス大学の前で

◎訪問した3つの大学の概要◎

カニシアス大学

- イエズス会系の私立大学（1870年設立）
- 学部生約3,500、大学院生約1,500
- 教員あたりの学生数約12

ナイアガラ大学

- カトリック系の私立大学（1856年設立）
- 学生数約1,500
- 教員数約130（常勤）

ニューヨーク州立大学バッファロー校

- 学部生約19,000、大学院生約9,200
- 教員数約1,600（常勤）



カニシアス大学CTEのPatさん

行われているようですが、CTEが中心となっており、Patさんが率いています（肩書きはDirector of Faculty Development）。専用のオフィスがありますがそれほど広いスペースではありませんでした（3部屋？）。スタッフの数は少ないようです。紹介いただいた中には情報通信技術（ICT）の利活用を支援するスタッフもいました。本学の情報センターのような役割も担っているように見えました。今回の受け入れに際しお礼を伝え、CTEの位置付けなどから懇談を始めました。その後、場所を図書館に移し、他の関係者も交えて意見交換を行いました。お昼には昼食会を設定していただきました。午後は学内見学させていただいたのち、スタッフルームでコーヒータイムの意見交換、翌日のスケジュール確認などと、充実したあっという間の1日でした。

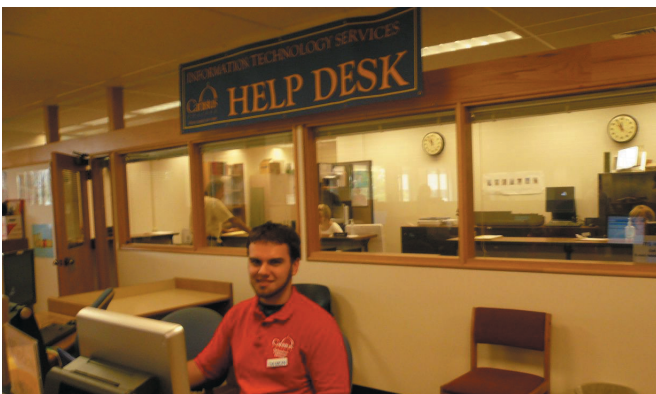
なお、この大学の図書館はラウンジのような雰囲気があり、非常にリラックスできるのですが、多くの学生は其中で黙々とPCを使ったり、



ナイアガラ大学



ナイアガラ大学のJenniferさん



カニシヤス大学の図書館の様子（上3枚共）



ナイアガラ大学学長先生(右から4人目)に迎えられ記念撮影

書籍に目を通したり、ノートに鉛筆を走らせたりと、真剣に取り組んでいる様子が印象的でした。講義の合間に訪れる学生が多いと云うことでしたが、長時間学習できるような雰囲気でした。

9月15日もPatさんの出迎えを受け、この日は直接ナイアガラ大学へ向かいました。車で40分程度の時間で到着しました。ここでは、Center for Instructional SupportのJennifer H. HermanさんがFD活動の紹介をしてくださいました。Jenniferさんの肩書きは、Director of Instructional Supportです。オフィスで簡単な

懇談の後、学内見学、授業見学と意見交換の時間を持ちました。驚いたことに、昼食時にはナイアガラ大学の学長先生がご挨拶に見えられ訪問団一同恐縮してしまうひとコマもありました。



ナイアガラ大学のコンピュータ実習室

Center for Instructional Supportの具体的なFD活動としては、今年の1月にナイアガラ大学で開催した、International Conference on Teaching and Learningを共催したという紹介がありました。

コンピュータ実習室も見学させていただきましたが、本学の設備との差は感じませんでした。この日はPatさん、Jenniferさんを囲んで、ささやかな夕食会を開きました。

いよいよ訪問最終日の9月16日です。Patさんの車で初めにカニシアス大学へ行き、ニューヨーク州立大学バッファロー校訪問の準備等を済ませ、Patさんの案内でバッファロー校へ向かいました。バッファロー校はこれまでの2つの大学に比べ規模が非常に大きく、バッファローにも大きなキャンパスが2か所あるほどです。ここではTeaching & Learning Center (TLC)のRoberta (Robin) SullivanさんがFD活動について紹介してくださいました。彼女の肩書はInstructional Designerです。規模の大きい大学ということもあり、スタッフの数、オフィ



バッファロー校TLCでRobinさんを囲んで



お昼休みも研修中 (バッファロー校)

スのスペースもこれまでの大学よりは恵まれています。オフィスの奥にはFD研修ルームがありますが、そこではお昼休みの時間帯にもかかわらず、研修を受けている姿が見られました。この大学では様々な分野の研修(ワークショップ)が用意されています。例えば、“Designing and Delivering Effective Lectures and Presentations”、“Principles for Constructing Good Clicker Questions”といった内容もあれば、“Creating Movies from Screen Captures”のように教材づくりの技術的なサポートについてであったり、“Plagiarism Prevention using SafeAssign”といった内容まで広範囲にわたっています。希望する研修をTLCに申し込めば受講できるようです。

オフィスにはその他に会議室、教材作成室もありました。スタッフに設備、サービスと、あらゆる面で力を入れていることを実感しました。その後、カニシアス大学へ戻り、正規の授業を



ニューヨーク州立大学バッファロー校



カニシアス大学での哲学の授業
(無線LAN、プロジェクタ、タブレットPC)



カニシアス大学での電子工学の実習授業



カニシアス大学でのビジネス系科目

見学させていただきました。哲学（座学）、電子工学（回路の実験）、ビジネス関連の科目（プレゼンテーションとディスカッション）の3クラスにお邪魔し、授業見学をさせていただきました。

哲学の授業は出席者が20数名の少人数で、基本的には教員がスライドを使いながらの講義ですが、随所に質問を織り交ぜる従来型の授業でしたが、中には授業とは関係のない(?)サイトを覗いている学生もいました。携帯電話の操作に夢中の学生もいました。しかし、おおむね双方向での授業が成立していました。

電子工学の授業は実習でした。学生は10人弱で、教員が3名おりました。最初に全員を前に集めてテキストに沿った内容を説明し、その後、自由に回路作りに取り組ませているようでした。終わった(?)学生は教室から順次退出していました。それにしても教員が多いのには驚かされました。

ビジネス系科目の授業では1つのテーマに対してあるグループが検討してきた結果を、プロジェクタを使って発表し、その後、学生同士の議論をへて、教員が締めくくるスタイルの授業でした。議論の際には発表を聞いていた学生からいくつも手が挙がる場所に本学での同様の授業との違いを強く感じました。学生数は20数名でした。

所感

日程に沿って今回の訪問の様子を述べさせていただきましたが、今回の訪問によって、FDについて米国の大学が取り組んでいる内容を詳細に調査してくるというよりは、FD先進国といわれる米国の取り組みをとにかく肌で感じてくることができたと考えています。感じることでできた主なポイントは以下の3点でした。

(1) FDセンター（組織）の充実

どの大学にも、FD活動の中心となる組織があり、専門のスタッフが企画から実施まで一所懸命やっているということです。

(2) 同等のIT化レベル・教員間の温度差

訪問させていただいた大学では教育のIT化レベルが特別高いわけではありません。LMSを活用しているのは当然ですが、普通教室、コンピュータ室のIT

設備も本学と違いはありませんでした。また、FDの取り組みに関する教員間の温度差も、日本の大学の状況と大きな違いはないようでした。

(3) 高額な授業料と少ない授業担当コマ数

日本の大学に比べて授業料は高額のようです。そのために少人数教育が可能であるとともに、教員の授業負担が少ないようです。

今回、得られた知見のすべてが本学のFD活動にそのまま生かせるわけではありませんが、羨ましく感じたことは、FDセンターの充実、すなわち、専門スタッフの確保、スタッフルームや研修設備などの確保といったFD活動のインフラがかなり整備できているように見えた点です。教員が授業改善のために、研修で学んだり、その知識や技術を生かして教材研究や教材作成に取り組める十分な時間を確保でき、その結果としての授業に対する適正なアドバイスが得られる機会を作り出せる組織が整備されているようです。そうしたインフラの上で、ICTを活用したFD支援システムを武器にFD活動を推進できればとの思いを強くしました。

さて、今回の訪問は、訪問団の一員である三浦先生のご尽力で、カニシアス大学を紹介いただいたところから具体的な計画がスタートしました。カニシアス大学はFDに力を入れており、北米で2位の評価をいただいているとの話もありました。その後、ソーラ先生が窓口となって連絡調整を行っていただいた結果、近隣を含めた3大学の訪問が実現できました。

さらに、現地の各大学のスタッ

フが温かく迎えてくださったことが今回の成果につながったものと感じています。とりわけカニシアス大学のPatさんには、打ち合わせの時から心遣いをいただいただけでなく、3日間をほとんど付きりでお世話いただきました。訪問団一同、感謝に堪えない思いでいっぱいです。今回の訪問についてはカニシアス大学も関心を持っていただけたようで、いち早くwebサイト上で報告しておりました。こうした機会を大切にして、大学間のつながりへと発展していければとも考えています。

today's News

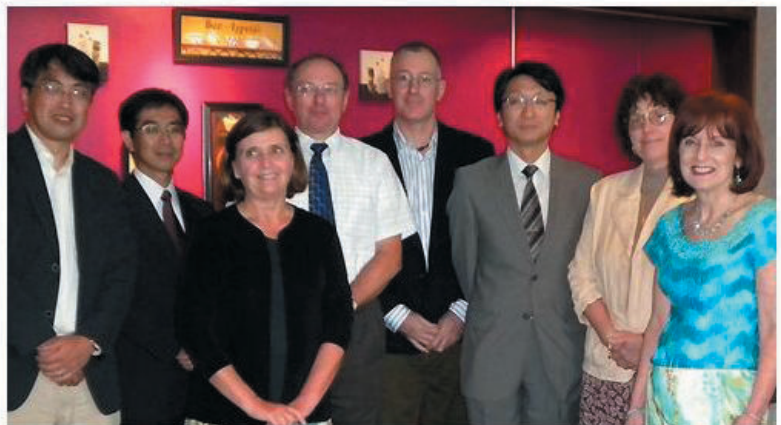
[Welcome to Canisius](#) > Under the Dome

LAST UPDATE: 9/18/2009

Top News Items

Delegation From Hokkaido Information University In Japan Visits Canisius

The Center for Teaching Excellence (CTE) recently hosted a fact-finding delegation from Hokkaido Information University in Sapporo, Japan. The four professors looked at Canisius' model for the CTE as well as similar centers at Niagara University and the University at Buffalo. While they were on campus, team members visited the offices of the CTE, FacTS Center, and Bowhuis Library, and talked to various staff members. They also attended an Early Modern Philosophy class taught by John Zeis, PhD; an electronics lab run by Debra Burhans, PhD, Mark Meyer, PhD and David Sheets, PhD; and international business classes taught by Coral Snodgrass, PhD.



Members of the Hokkaido Information University with Canisius staff: (l-r) Dr. Tsuyoshi Mukohara (Hokkaido), associate professor of business administration and information science; Dr. Takanori Yamakita (Hokkaido), professor of information media; Estelle Seiner, director of academic computing; Jerry Neuner, PhD, associate vice president of academic affairs; Dr. Simon Thollar (Hokkaido), associate professor of business administration and information science; Dr. Hiyoshi Miura (Hokkaido), professor of philosophy; Coral Snodgrass, PhD, professor of management and marketing; Esther Northman, director of international student programs and study abroad. (photo by Dede Johnson)

The visit was arranged by Mark Bunting, associate director of admissions, and Patricia Coward, PhD, director of the Center for Teaching Excellence.

Submitted by: Dede Johnson, assistant to the director, Center for Teaching Excellence

カニシアス大学のサイトより転載

FD活動 行事予定

日 程	行 事
10月～	チュータ制度の試行 (数学、英語、プログラム言語、留学生日本語、資格取得支援)
10月 1日(木)～	ピアレビューの実施 (一部CANVASを利用したピアレビュー報告書の利用)
11月 3日～ 11月 6日	EDUCAUSE 2009 (米国コロラド州デンバー市 デンバーコンベンションセンター)
12月 7日(月)～	CANVASモニターの実施
12月22日(火)	第8回 FD委員会・FD推進連絡会議
1月 5日(火)～	学生による授業評価アンケート
1月 5日(火)～	「～学生が選ぶ～教え上手な先生」投票
1月中旬	平成21年度 第2回新任教員研修
1月 7日(木)～ 1月 8日(金)	平成21年度 大学教育改革プログラム 合同フォーラム ポスターセッションへ参加(8日)
1月27日(水)(予定)	第9回 FD委員会・FD推進連絡会議
2月(日程未定)	カリキュラム・アドバイザーボード会議
2月24日(水)(予定)	第10回 FD委員会・FD推進連絡会議
3月(日程未定)	平成21年度 第2回教育GP推進協議会
3月(日程未定)	FDフォーラム

FD委員会WGの活動実績

WG名	ミーティング
WG1 (学生による授業評価アンケート)	9月 9日、10月14日、11月11日
WG2 (ピアレビュー制度の導入)	9月 3日、10月13日、11月10日
WG3 (GPAとコンピテンシーの導入)	9月11日、10月16日、11月13日
WG4 (ICTの活用推進)	9月17日、10月19日、11月13日
WG5 (イベント・教育活動支援情報の企画)	10月22日、11月19日
WG6 (チュータ制度の導入)	9月28日、10月21日、11月16日
WG7 (ファカルティ・ポートフォリオの導入)	10月23日、11月27日
WG8 (カリキュラム・デベロップメント)	9月 9日、10月21日、11月18日
WG9 (Own Teacher制度の導入)	9月10日、10月21日、11月17日
WG10 (日本語リメディアル教育検討)	10月29日、11月18日

編集後記

今年、FDに関する業務で、国内外のFD先進大学を訪問しました。感心し、うらやましく思えることも数多くありました。ですが、ほとんどの教職員がFD活動に関与している本学のような大学はありません。皆さんは本当によくやっています。残念なのは、この実感を共有しているのは、ほんの一部の教職員にすぎないということです。それではいけません。情報・知識・感動を共有できる環境作りに長けていることこそが本学の強みでしょうから。次回のFD視察はあなたにお願いすることでしょう。よろしくお祈りします。

(WG2 向原)